

秋建時報

秋建時報

平成20年5月1日(第1169号)



発行／(社)秋田県建設業協会
秋田市山王四丁目3番10号
TEL 018(823)5495
FAX 018(865)2306

<http://www.a-kenkyo.or.jp>



南風の薫五月、木々の緑は日増しに濃くなり、命が躍動する。それを祝福するかのように、陽光が金色の幸せを降り注ぐ。

「幸せ降る」絵・文：白澤 恵舟

(社)秋田県県土整備 コンサルタンツ協会誕生

会長 菅原 三朗

この度、(社)秋田県測量設計業協会・秋田県土地改良事業設計業者協会・秋田県建設コンサルタント協会の三協会が合併して、平成二十年四月一日新たに(社)秋田県県土整備コンサルタンツ協会が設立されました。

合併の基本理念としては、これまでの各協会の力を結集し公益法人として、更なる県土の整備をはじめ、災害時における県民の安全・安心の確保、技術の向上・継承などを通じ安定した地域社会の発展に一層貢献する、組織体制の確立を目指しております。

三協会には夫々、設立の目的と背景や経緯があり、またこれまでの歴史も育くんでこられました。

しかしながら、近年の業界を取り巻く社会環境・経済状況の変化に対応できる、組織再編の必要に迫られ、各協会の発展的な解消を余儀なくされたことは、残念であったことと思っておりますが、しかしそれを乗り越えて、新組織への結集を決意されましたことは、時代のニーズを先取りする大英断であり、関係皆様のご尽力に対し深く敬意を表したいと存じます。

近年の県内建設産業を取り巻く環境は、引き続き政府の財政構造改革と、地方公共団体の財政逼迫の影響から、公共事業費はピーク時の半分以下に削減され、これに伴うダンピング受注が横行し、建設産業界の疲弊につながるのみならず、公共工事の品質の確保や、ひいては地域経済の発展や雇用の確保にも深刻な影響を及ぼしかねない状況にあります。このような環境の中にあつて、公共工事の川上である測量・地質調査及び建設コンサルタント業務に

おいて、夫々重要な役割を果たしてこられた三つの協会関係者の皆さんが、時代の流れと厳しい現状を真摯に受け止め、意識改革・組織改革を図り更なる調査及び設計の品質の確保を目指して、組織統合を成し遂げられましたことは、まさに「公共工事の品質確保の促進に関する法律」の基本理念に合致するものであり、秋田県建設産業団体連合会としても、御同慶に堪えないところであります。

どうか新しい協会の運営並びに事業が、技術と経営にすぐれた企業集団を作り上げるため、一層活発に活動を展開され、その成果が確実に実ることを願って止まないところであります。

(社)秋田県県土整備コンサルタンツ協会のますますの発展と、会員皆様の一層の御繁栄をお祈り申し上げたいと存じます。

雇用改善推進委員会を開催

推進方針、実施計画など承認

県協会では、4月25日（金）秋田ビューホテルにおいて、秋田労働局、秋田県及び関係団体による雇用改善推進委員会を開催した。

会議の冒頭、委員長代理を務める（社）秋田県建設業協会仙北支部所属の宮本副委員長が「我々建設業を取り巻く状況は、若年労働者の新たな入職者の減少と離職率の上昇傾向、労働者の高齢化や激化する他産業との人材確保競争、ダンピング受注による労働者へのしわ寄せが懸念されるなど、依然として厳しい状況が続くものと考えております。皆様から雇用改善へ向けての忌憚のないご意見をいただきたい」とあいさつ。

引き続き協議事項に入り、事務局から平成19年度雇用改善推進事業（第2種）実施事業報告、平成20年度雇用改善推進方針（案）、平成20年度雇用改善推進事業（第2種）実施計画（案）について説明があり、20年度実施計画では、継続事業として秋田県建設雇用・改善推進大会、入職促進に向けた人

材確保・育成推進協議会、建設系工業高校教諭との懇談会、建設女性技術者交流会の開催や、高校生の現場見学会・インターンシップの実施とともに、昨年度実施しなかった若年建設従事者座談会を今年度は開催するなどの推進方針、実施計画が承認された。

また、委員からの意見として、「インターンシップは高校生に建設業の魅力を知ってもらうためにも

必要であり、そのために受け入れに積極的な企業を評価して欲しい」という要望があったほか「若年層の雇用を定着させるには賃金もさることながら休日や労働時間などの条件を改善すべきだ」「3Kと言われていた建設業界の労働環境を整えて労働者のために働きやすい環境を作っていくのが雇用改善事業の目的だったが、今は労働環境を改善する前に建設業の地盤を整えなければならない」などといった意見が出されるなど、積極的な意見交換が行われた。



技士会

国交省電子納品対応を目指す

秋田県土木施工管理技士会（北林一成会長）は、4月8日から15日にかけて、北秋田市、能代市、秋田市、大仙市の県内4ヵ所を会場に電子納品対応講習会を開催し、延べ150名の技術職員が参加した。

同講習会の主題となっている「道路施設基本データ」及び「完成平面図」は、平成18年8月に国土技術政策総合研究所より公表された「道路工事完成平面図等作成要領」において、維持管理等の高度化・省力化のため、国交省直轄の道路工事で新たに作成するものと定められている。

講習では、ダイナウェ

ア・システムズ・ラボ（株）の渡邊、船木両氏を講師に招き、これらの追加事項を中心に、要領のポイントから、データの作成方法、成果品のチェック、納品までの流れを学習した。



ご案内

表彰式・第76回 定時総会

（社）秋田県建設業協会では5月27日（火）、表彰式並びに第76回定時総会を下記により開催いたします。

記

- 表彰式
 - 時間 午後3時～
 - 場所 秋田キャッスルホテル（矢留の間）
 - ・社団法人 秋田県建設業協会表彰
 - ・社団法人 全国建設業協会表彰伝達
 - ・財団法人 建設業福祉共済団表彰伝達
 - ・社団法人 全国土木施工管理技士会連合会表彰伝達

- 定時総会
 - 時間 午後3時30分～
 - 場所 秋田キャッスルホテル（矢留の間）
- 懇親会
 - 時間 午後5時10分～
 - 場所 秋田キャッスルホテル（放光の間）

協会人事

退任 (3月31日)	後任 (4月1日)
建設業労働災害防止協会 秋田県支部 事務局長 青木 和夫	福原 順子
秋田県土地改良建設協議会 事務局長 青木 和夫	三浦 和行

(財)建設業福祉共済団から 建退共秋田県支部から

※上記の記事はホームページに掲載されています。

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

情報コラム Vol.21

国土交通省直轄工事における 低入札価格調査基準価格の見直し

国土交通省では直轄工事において、▽落札率85%以下になると、下請け企業が赤字、または平均点未満の工事になる割合が急増▽予定価格の85%を下回る調査基準価格の直上で応札が集中するという状況を踏まえ、公共工事の品質確保を図る目的から、以下の通り低入札価格調査基準価格の算定方法を見直し、4月以降に入札公告の工事において適用しております。

▽予定価格の3分の2から10分の8.5までの範囲内で、予定価格算出の基礎となった次に掲げる額の合計額に、100分の105を乗じて得た額。

▽ただし、その割合が10分の8.5を越える部分にあつては10分の8.5と、3分の2に満たない場合にあつては3分の2とする。

【旧算定方法】

- ① 直接工事費の額
- ② 共通仮設費の額
- ③ 現場管理費の20%



【新しい算定方法】

- ① 直接工事費の95%
- ② 共通仮設費の90%
- ③ 現場管理費の60%
- ④ 一般管理費の30%

近代化 遺産

土木 建築の

No.68

木村屋商店

横手市大町5-23



旧羽州街道が通る横手城下の大町にある老舗の菓子店、木村屋は土蔵造り店舗である。「柿羊羹」で知られる菓子店の創業は明治三十五年（一九〇二）で、店舗の建築は日露戦争開戦の年、同三十七年に着工し翌年、竣工したものである。

大町通りを挟んで「平源」と「平利」の両旅館が建っている。土蔵店舗は当時、流行のものであったのか、横手、平鹿地方にも割合多く残されている。

木村屋商店（菓子店）は現当主、山下惣一氏の祖父山下九助氏（一八七二〜一九三八）が創業、東京三田の木村屋で修行した後の開店という。黒漆喰塗の土蔵建築は桁行二二・七九〇メートル、梁間七・九七〇m、二階建て、平入、切妻造、鉄板葺、面積は約五・七九平方メートルとなっており、今でも往時の異彩を保っている。

木村屋商店創業者の九助氏は菓子職

人であると同時に発明研究家の顔も合わせ持っていた。画期的な発明としてオブラートとアルミ箔を使った羊羹の包み「衛生紙缶」は広く世に知られるところとなった。このオブラート開発には、アラビア太郎の異名を持つ従兄弟の山下太郎氏も協力したという。

また、その衛生紙缶は、もともと羊羹の変質防止のために考案されたものだが、オブラートの特許を取得したあと、日本鋼管（NKK）の創業者である白石元治郎氏と契約し「山元オブラート」として売り出された。

土蔵造り店舗は経耐用年数から近年、各地で著しく取り壊しが進んでいるが、往時のファサード（建築正面）を残す近代化遺構のひとつ、「黒漆喰塗の土蔵」として国登録有形文化財となっている。

（取材・構成／藤原優太郎）

我らが宝、秋田弁

あゆかわ のぼる (エッセイスト)

時々文章にしたり、インターネットで発信したり、それらを本にまとめたり、人前で話したり、TVやラジオで素人解説をしたり、秋田弁と遊んでいる。

もう20年余り続いていて、とてもやめられない。

そんなことをしていると、たまには思いがけない至福の時と出会うことがある。

昨年、鹿角市で日本折り紙学会という団体の夏季講習会があった時、呼ばれて話をした。

主催者から与えられたテーマが、『秋田弁の魅力』。

たかが折り紙、と思って出掛けたら、されど折り紙。世界規模の学会で、会場には5百人もの会員が全国から集まり、韓国やオランダからもゲスト参加するという大規模な研修会だった。

2泊3日の研修会の2日目に話をした。

各県持ち回りで毎年全国から会員が集まる研修会で、同部屋の人たちが、夜を徹して各自の技術の披露とか情報交換をするのが楽しみらしいのだが、今回は2日目の夜は、各地の方言の披露に費やされた、と後日主催者から聞かされて嬉しかった。

もう一つは数年前、秋田市を会場に行われた全国番茶道の大会。この大会でも主催者の希望で秋田弁の話をした。私の話は最終日の午前中。お昼休みは会場のあちこちでお国言葉談義に花が咲き、名誉会長を努めておられた、秋田県出身の小野清子参議院議員（当時）に、「久し振りのふるさと言葉で懐しいやら、全国からこられた方々にこんなに喜んで貰って鼻が高いやら…」

とおっしゃっていただき、恐縮したこともある。

こんな記憶もある。

私は、一時、若者向けのタウン情報誌に秋田弁の周辺で戯れる雑文を連載していたが、その頃の話である。

セリオンリスタを見学していたら、4、5人の若い女性グループに声を掛けられた。

「あゆかわさんですか」

「ハイ」

「ワーッ！」

もちろん、その後に握手をしたり、頬とホホをくっつけ合ったり、抱き合ったりはしなかったが、有頂天になった。彼女たちは短大生で、そのタウン情報誌の愛読者。私の雑文を毎号読んでくれていたのだった。

もう一つは、腸閉塞で病院に緊急入院した時。

集中治療室に運びこまれたのがスタートだったせいと思っていたが、担当して下さった若い先生が徹夜状態で診てくれ、日中も2度3度と来てくれては体の調子を診てくれる。その熱心さにすっかり恐縮してしまった。

半月近く入院したが、期間中いくつかのスケジュールが入っており、中にどうしても断れないのがあり、市内で行う講演には、先生に許可を貰って、点滴の針を腕に刺したまま出掛け、婦長（当時）に、「ウチの先生はなんでアンタに親切で、ワガママを聞き入れるんだろう」

と怒られた。私もその訳が分からなかった。

退院の日、先生に厚くお礼を言うと、「私はあなたの書いた本を全部読んでいるし、TVもよく見る。タウン情報誌の愛読者で、あなたのファンだ」

と先生がおっしゃり、腰が抜けるほどびっくりした。

そんなことが時々あるが、地元の人は概して秋田弁に冷たくて関心も薄い。勿体ないと思っている。

今もNHKのローカル番組で秋田弁の話をしているが、それ程関心を示してくれない。年配の人はそこそこののだが、40代から下くらいの若い人は、秋田弁をほとんど知らないか、無視するか、鼻であしらう。

ところが、4月の放送は、反応が大きかった。『漢字で書けるゾ！秋田弁』というテーマでやったのだ。

どんな言葉を取り上げたかという、「淋しい」「退屈だ」を言う「とせねえ」。これは、漢字で『徒然』と書く。江戸時代のエッセー集の『徒然草』は、兼好法師が「無聊を慰めるためにつれづれなるままに」書いた。

「遠慮」を秋田弁では「じんぎする」というが、さて、漢字ではどう書くか。答えは、『辞儀』。国語辞典の『御辞儀』を開くと、「遠慮・辞退」とある。昔の武士などは、「辞儀なしに馳走になる」と言っていたらしい。「どやぐ」もやった。「友達」「同僚」のことで、『同役』と書く。「あなたと私は、上下、主従の関係ではなく、まったく同列ですよ」ということだ。「なあ、ご同役」。

これらをNHKホールに来られた人たちに、クイズ形式で書いて貰った。

正解はなかったが、みなさんが驚き、やがて、「なるほどなあ」という顔をされた。

放送が終わってからも、何人かの人に「面白かった」「納得した」と声を掛けられた。特に若い人がびっくりしたようで作戦は成功した。

こういう言葉は、他にもたくさんある。

例えば、「びっくり」。秋田弁で「どでん」というが、漢字で書けば『動転』。

「一回」「一度」を「ふとげあり」「ひとげあり」というが、これは、『一返り』、『源氏物語』に出てくる。

あるいは、旬の山菜や採れたての野菜、美味しく漬けたガッコなどを隣近所から貰うことがあるが、そんな時、「ふとがだけだども…」と言う。この「ふとがだけ」あるいは「ひとがだけ」は、『一片食』。昔は、食事は朝と夕の二食だったといい、そのうちの片方だから『片食』で、「かたき」。秋田弁に、「ふとがだけ」で残っている。

ついでにもう一つ書けば、18年ほど前、評論家の草柳大蔵さんと、方言の魅力についてTVで対談した時、日本一暖かくて優しい方言と折り紙を付けてくれたのが、「寄ってたんせ」、「見てたんせ」の「たんせ」。

語源は『賜る』。あの「天王賜杯」の恐れ多い、雅語のような『賜』だ。それが「たもれ」となり秋田弁の「たんえ」「たんしえ」「たえ」、「たんせ」。「漢字で書けるゾ！秋田弁」という一点で、ほんの少し引き出しを開けただけで、秋田弁はこんなに豊かな言葉であることが分かる。

ところが、方言は過去に「汚くて悪い言葉」と言われて、追放運動にあった。特に、昭和30年代は、日本の戦後復興の上昇カーブの大きい時で、地方から金の卵と言われる若い労働者が都会に向かった。その若者達が汚くて悪い言葉を使つてつらい思いをしないようにという親心だったのだ。

さらに、TVの普及で標準語、共通語が全国に広まったことで、方言は瀕死状態になった。

しかし、ここに来て、息を吹き返してきた。

再び蘇るかどうかの鍵を握っているのが、知らないから使えないヤングファミリーである。

蘇らせよう！我らの宝、秋田弁。